南 晃二 校長先生

（大阪府立住之江支援学校）

授業の感想を聞かせてください。

授業前に、新木さんが来ることを伝えると、生徒たちは「オリンピック・パラリンピックのポスターをかいたすごい人に会える！」と、みんなワクワクしていました。いざ新木さんにお会いすると、とても緊張していましたね。まわりに「アーティスト」とよばれる人がいないからでしょう。生徒たちは、とても集中してワークショップに参加していました。できあがった作品に対する新木さんのコメントが心に残っています。新木さんご自身が絵をかく方だからこそ「みんなとちがうユニークなところ」や「がんばってかいたところ」をみぬかれていたと思います。生徒たちの表情がパッと明るくなったのをみて、「私たちはこれまで、生徒たちの表現を大人の目線でほめていたのかもしれない」と、ふり返りました。

支援学校における「美術の授業の役割」について、どのように感じておられますか？

これは障がいの有無は関係ないのかもしれませんが、学年があがるにつれ「絵をみる力」は高まるけれど、「表現する力」は追いつきにくいように感じます。自分の思いどおりに絵がかけないと、少しずつ「自分は絵をかくことが苦手なんだ」と思うようになってしまうことがあります。とくに、障がいのある生徒は、友だちとくらべて自分の絵を幼く感じたり、友だちに「何それ？」と言われて、自信をなくしてしまうことも多いのではないでしょうか。支援学校の美術の授業では、「のびのびとかいていいんだよ」「あなたの表現はすばらしいよ」ということを生徒たちに感じてもらい、自分の表現に自信をもってもらうことが大事な役割だと考えています。

支援学校を卒業した後の進路として創作活動を選ぶ方はいらっしゃいますか？

私が知るなかでは創作活動をお仕事にしている方は存じあげません。レストラン・カフェといった飲食関係や服・雑貨を売るなど、人と接する仕事を好むことが多いです。日常生活でよく目にする職業なのでイメージしやすいのでしょう。

生徒の将来の可能性を広げるために、支援学校にはどんな役割がありますか？

生徒たちが新しいことに取りくむ姿をみて、「この子はこれが好きなんだな」と、そばにいる先生や保護者が気づくことができたら、その子の「好きなこと」を活かした将来につなげていくことができると思います。そのためには、学校生活の中で自分の好きなことをみつけたり、今回の新木さんの授業のように、生徒たちが新しい経験をできる機会をつくりたいですね。

舞 美佳 先生

（大阪府立住之江支援学校 美術の先生）

授業の感想を聞かせてください。

世界を舞台に活躍する新木さんの色鮮やかな作品を直にみることができて、生徒にとってはもちろん、教員にとっても、刺激的な体験になりました。これまで、ピカソやゴッホといった歴史上のアーティストを美術の授業で紹介することはありましたが、実際にアーティストとして活動している方とお会いするのは初めてのことでした。新木さんのアーティストとしての姿は、生徒たちにとって将来への希望を感じるきっかけになったのではないでしょうか。とくに、ワークショップでは、とても楽しそうに絵をかいていました。自分の絵に自信をもっているように感じる良い表情をしていたことが心に残っています。

いつもはどのような美術の授業をされているのですか？

オリジナルの生き物をかいたり、手形をかさねた色彩構成のようなことをしたり、点描をしたりとさまざまです。同じ学年でも、生徒によって必要な支援の形が変わりますので、それぞれに課題や画材を考えていますね。支援学校の美術教員になって10年以上になりますが、初めのうちは支援しすぎていたかもしれません。「この生徒はどれくらいできるだろうか」「この画材はつかえるだろうか」と考えすぎて、こちらがほとんどつくったようなものを準備してしまったこともありました。いまは生徒のもっている力を活かした授業になるよう心がけています。

美術の授業が好きな生徒さんはいますか？

絵をかくことが好きな生徒は多いです。「あれがしてみたい」「これしてみていい？」と、自分から聞いてくる子は、ものづくりが好きなんだなと感じますね。こちらからの課題や決まりを設定していても、そこからはみ出すような表現が出てくると「素敵だな」と思います。

ものづくりが好きな生徒さんは、卒業後どんな道に進まれますか？

創作活動をお仕事として活かすのは、なかなか難しいように思います。なぜなら、自分の作品を売ったお金で食べていくというのは、障がいのあるなしに関わらず簡単なことではないですよね。そのため、こちらから積極的におすすめするのは難しいと感じたりもします。だけど、ものづくりが好きな子が、新木さんのようにアーティストになれたらとても素敵だと思います。本人が望むのであれば、できるかぎり応援したい。ものづくりが好きな子が通えるインカーブのような場所が増え、生徒たちの将来が広がることを願っています。

恩師・大島 昇さん

（元支援学校の先生・FBM研究会）

支援学校の教員として新木さんと出会い、卒業後もみまもってくれている大島さんに、新木さんの学生時代のことを聞いてみました！

新木さんとの出会いをおしえてください。

出会いはプールの授業です。私が大阪教育大学附属特別支援学校の教員をしていたとき、新木くんが入学してきました。当時は体も小さく、気管切開をしていたため、私は養護・訓練担当※2としていっしょにプールに入りました。新木くんをリラックスさせるために冗談をいっているうちに、おたがいうちとけていきましたね。気管に水が入らないよう、あお向けになった新木くんの頭と首をささえて体をゆらしたりしました。すごく喜び、笑顔で私にだきつきキスをしてくれたことが忘れられないです。

※1 気管切開：自力では呼吸がしづらいため、のど（気管）に穴をあけること　※2 養護・訓練担当：ハンディの重い方や、家族指導を必要とする生徒の指導やケアにあたる役職

印象に残っていることはありますか？

美術の授業でかいた「ギター」の作品が印象に残っています。新木くんは、実物とまったくちがう形や色のギターをかきました。「こんな風にかけるんや！」と、とてもおどろき、感動しました。卒業後の進路先をさがしていたとき、美術の授業でみた「ギター」の作品が頭にうかび、アトリエ インカーブに相談しました。

卒業後も交流があり、新木さんの作風に影響をあたえたとうかがっています。

はい。新木くんが興味をもちそうなことがあれば連絡をとっていました。格闘技が好きなことを知っていたので、私が体調管理のためボクシングジムに通いはじめたことを伝えたりしました。10年くらい前の話です。彼は何度もジムに練習をみに来てくれました。世界タイトルマッチもいっしょにみに行き、とてもうれしそうにしていましたね。当時、新木くんの関心はプロレスが中心だったけど、少しずつボクシングを作品にとりいれるようになったと感じています。有名なボクサーとのつながりもできました。だれとでも仲良くなれるところや、人の気持ちを考えることができるのは、まねできない新木くんの素敵なところだと思っています。

今回の授業の感想を聞かせてください。

将来の可能性を広げるために、人との出会いはとてもたいせつです。新木くんの授業は、支援学校の生徒たちが外の世界を知り、興味を広げるきっかけになったと感じます。また、「アートって楽しいな」と、まっすぐに感じることができたのではないでしょうか。先生方にとっても、新しい目で美術教育をとらえなおし、前向きにチャレンジできるエネルギーと勇気をえたことと思います。この経験をこれからの日々の実践に活かしていただけることを大いに期待しています。

みんなへ

これから社会にでたら、わからないことや
緊張することがあるかもしれません。
ときには、失敗することもあるでしょう。

ぼくも、今日までたくさん失敗してきました。
思うように作品がかけなかったこともあります。
それでも、なんまいも、なんまいも、かいてきました。
絵をかくことが、好きだから。

みんなにも、好きなことをみつけてほしいと思います。
そして、自分の夢を思いえがいてみてほしいです。

ぼくのように、想像していなかった未来が
まっているかもしれないから。

新木 友行

この本ができた理由

新木友行さんは、支援学校で学生時代をすごしました。卒業後、アーティストになり、今では世界を舞台に活躍しています。好きなことを活かして社会とつながる新木さんの存在を知ってもらうことで、将来の選択肢が広がることを願い、大阪府立住之江支援学校で授業をおこないました。そして、他の支援学校の方々にも、授業の内容を知ってもらいたいという気持ちから、この本はうまれました。アーティストとしてプライドをもって生きる新木さんの姿が、みなさんの希望になれば、これ以上の喜びはありません。この本が、学校を卒業し、社会に飛び立つみなさんにとって、自分自身の「これから」を考えるきっかけになることを願っています。最後に、本事業の実現にあたり、たくさんのご協力をいただいた大阪府立住之江支援学校の教員のみなさま・大島昇さまに心より御礼申し上げます。

アトリエ インカーブ

ことば・作品：新木友行（アトリエ インカーブ）
インタビュー：南晃二（大阪府立住之江支援学校）
舞美佳（大阪府立住之江支援学校）
大島昇（FBM研究会）
編集：片岡學・脇阪明日香（アトリエ インカーブ）
装丁・デザイン：八木良治（有限会社八木デザイン）
撮影：左海和可子・東亨（アトリエ インカーブ）
印刷・製本：株式会社グラフィック

発行日：2022年3月1日
発行者：アトリエ インカーブ
発行所：ビブリオ インカーブ
©2022 atelier incurve

社会福祉法人 素王会 アトリエ インカーブ
〒547-0023 大阪市平野区瓜破南 1-1-18
電話番号　06-6707-0165
FAX　06-0707-0175
メール　info@incurve.jp
ホームページ　http://incurve.jp

表紙作品：Mix No.2
2021年 ペン、色えんぴつ／紙
30×158 センチメートル

本書に掲載の作品サイズは小数点以下を四捨五入して表記しています。
本書の無断転写・複製・引用を禁じます。

文化庁
本事業は、文化庁「令和3年度障害者等による文化芸術活動推進事業（文化芸術による共生社会の推進を含む）」の委託事業としておこなわれました。